

# 特集 コレクターの眼差し——モノの向こうに何を見るか

岸 文和

## 趣旨

「コレクション」の定義は、一見したところ、単純明快である。例えば、『日本国語大辞典』によれば、「コレクション」とは、「美術品、骨董品、切手、鉄道の切符など、自分の好みのある特定の分野のものを、趣味として集めること。また、そうして集まったもの。収集」のことである。要するに、「好みの分野のもの」を「趣味として」という限定は付いているものの、何かを集めることに変わりはない。しかし、何らかのモノを、なぜ、何のために集めるのか、ということになると、その答えは必ずしも単純明快というわけにはいかない。

本特集では、誰かが個人的に／組織として美術品などを集めることに、あるいは、制作者が何らかのモノを集めることに、どのような理由／目的があるのかについて、視覚文化という多面的なコンテクストを考慮することによって、考えることを課題とする。誰の、どのようなコレクションを対象とするか、コレクションのどのような側面(アスペクト)に焦点を合わせるか、また、どのようなアプローチの仕方を用いるかは、執筆者の自由に任される。古今東西のコレクションについて、収集／保存／展示などの多様な局面を、歴史学／美術史学／社会学的な観点から、

大胆かつ緻密に考察されることを期待するものである。

## ポミアンのコレクション論

特集のタイトル「コレクターの眼差し——モノの向こうに何を見るか」は、ポーランド出身の歴史学者であるクシシトフ・ポミアン(Pomian, Krzysztof, 1934)の『コレクション／趣味と好奇心の歴史人類学』(吉田城・吉田典子訳、平凡社、一九九二年)に由来する。そこで、以下、ポミアンのコレクション論を簡単に紹介しておくことにする。参考にしていただければ幸いである。

ポミアンは、まず、一六世紀から一八世紀にかけて、ヨーロッパ(パリやヴェネツィア)で形成されたさまざまなコレクションの事例——個人コレクション、博物館・美術館、墳墓の副葬品、神殿への奉納物、権力者(王)への贈物や戦利品、教会の聖遺物など——を念頭において、「コレクション」を次のような制度<sup>II</sup>施設として定義する(邦訳、二二頁)。

コレクションとは、一時的もしくは永久に経済活動の流通回路の外に保たれ、その目的のために

整備された閉ざされた場所で特別の保護を受け、視線にさらされる自然物もしくは人工物の集合である。

この定義において最も重要なポイントは、何らかのモノが、保護され、時として展示されることによって、本来の使用価値を失う代わりに、「貴重品」としての交換価値を獲得するという点にある。道具や貨幣は言うに及ばず、絵画でさえも本来の目的(使用価値)としての「装飾(Decoration)」——「絵画や彫刻を使用して、以前からそこにあつて心地よいものにする必要がある何もない壁の単調さを破る技術」(二〇頁)——のためではなく、特別な目的(交換価値)のために、特別の場所に集められ、誰かの視線に対して展示されるものとなる。では、それらの交換価値はいったい何に由来するのか、なぜ、それらは貴重品とみなされるのか。

ポミアンは、このような問に答えるのに、「所有本能」や「蒐集癖」に言及したり、あるいは、所有の目的を、「美的な快楽」や「歴史的・学問的な知識」を獲得したり、「威信をそなえる」ことに求めたりするだけでは充分ではないと考える。そのうえで、モノはすべて、コレクションを構成する要素である限りにおいて、

同じ一つの機能を果たしていると主張する。すなわち「コレクションを構成する品物が、見物人——それがいかなる人たちであれ——と、彼らがそこにはいない世界「見えない世界」の住人の間の仲介物の役割を演じることを可能にするという機能」である(四四頁)。ポミアンは、次のように言う(五三頁)。

コレクションの品物の交換価値の基礎となつてゐるのは、その意味作用である。それらが貴重である、すなわち人々がそれらに価値を与えているのは、それらが目に見えないものを表象するからであり、それによつて、見えないものに無意識のうちから付与されている優越性と豊饒性に参与しているからである。

重要な点は次の三つである。すなわち、第一に、コレクションの主要な役割は「目に見えるもの」によつて「目に見えないもの」を表象すること、すなわち、観賞者の視線を「目の前に存在するもの」を超えて「目の前に存在しないもの」——時間的／空間的に隔たった／超えたもの——を思考・想像する方向へ延長するように誘導することであるという点。

第二に、そのような表象作用は、展示者と観賞者が「目に見えないもの」についての言説——神話／宗教／哲学／科学「学問」——を共有し、かつ、それらの言説が目に見える個々のモノよりも優越した／豊饒なものであることが承認されてはじめて可能であるという点。

第三に、「目の前にある品物A」が「目に見えないものB」を表象する仕方には、次の四つの様態があり、コレクションを構成するモノは目に見えない世界の一要素とこれら四つのうち少なくとも一つの間係を保持しているという点である。左に示したのがその関係であるが、それぞれの下に例示したのは、「仏」という目に見えないもの「貴重な存在」と四種類の目に見えるモノの間係である。

- (1) AはBの一部である(部分性)。舍利は仏の一部である。
- (2) AはBに似ている(類似性)。仏像は仏に類似している。
- (3) AはBの産物である(由来性)。教典は仏が産出したものである。
- (4) AはBに近い(近接性)。仏足石は仏が接触したものである。

このようなポミアンの立場は、コレクションの研究を、個人的な趣味・興味・美的快楽の問題に回収してしまうことを許さない。その理由について、彼は次のように言う(五七―五八頁)。

「なぜなら、説明する必要があるのはまさに、趣味が他の品物ではなく、かくかくしかじかの品物の上に向けられるという事実、人々が興味を持つのがあれではなくこれであるという事実、快楽の源泉となるのはある決まった作品であるという事実であるか

らだ。個人の性格や感受性の多寡が重要になるのは、社会組織が個人的な差異の戯れに自由な場所を残しておくかぎりにおいてでしかない。したがって、問題となる社会——もしくは、その社会を構成する諸集団——が見えるものと見えないものあいだに境界線を引いているその方法を明らかにしなければならぬ。そこから実際、その社会にとって何が意味を持つのか、その社会はどんな品物を特権化するのか、それらの品物が蒐集家に要請する態度はいかなるものか、を明らかにすることができる」。

要するに、コレクションの研究にとって重要なことは、どのようなメンタリティーを持つ集団の間で(誰が誰の視線に対して)、どのような種類のモノが展示されることによつて、どのような種類の見えない世界が表象されるのかを明らかにすることなのである。

#### 参考文献

- 岸文和「明治一九年のギャラリー画——松浦武四郎コレクションの欲望について」『醍醐書房』『美術フォーラム21』第二号、二〇〇五年九月
- 岸文和「趣味と蒐集の地勢学——大正一四年の『趣味国名所図会』を読む」『近畿大学日本文化研究所編』『日本文化の攻と守』風媒社、二〇一一年三月
- 岸文和「スタンプ狂の時代——昭和一〇年の蒐集熱と観光旅行」平成二〇―三年度科学研究費補助金(基盤研究(B))、研究代表者・金田千秋筑波大学大学院教授「研究成果報告書」文化遺産としての大衆的イメージ——近代日本における視覚文化の美学美術史学的研究二〇一二年三月